平城天皇即位と『仁王経』安居講経

『類聚三代格』巻二・延暦二十五年四月二十五日官符

堀　裕

Heizei-Tenno's Enthronement and Lecture on "Ninno-kyo Sutra" at Ango: Daijokan's Command Dated April 25, Enryaku 25(806), from "Ruiju Sandai Kyaku"

HORI Yutaka

はじめに
❶延暦二十五年四月二十五日官符と『弘仁格』
❷平城天皇と『仁王経』安居講説
❸国分寺安居と『仁王経』
おわりに

【論文要旨】

日本古代の安居講経は、国家が期待する僧尼像・仏教像を象徴的に示すと考えられる。おもに『類聚三代格』延暦二十五年（八〇六）四月二十五日官符をとりあげ、政治史や制度史、史料学の視点から検討を行った。①この時、大寺と国分寺の安居講経に、新たに『仁王経』が追加されたのは、桓武から平城への皇位継承を契機にしており、早良親王等の祟りなど、新天皇にもたらされる災いを攘うことで、無事な即位や、治世の安穏を願ったことにある。②一代一度仁王会の開始や、宮中年料写経の伝鳩摩羅什訳『仁王経』への転換との関係も推測され、国家制度の重点が、五穀豊穣を祈念する『最勝王経』から、災いを避けるための『仁王経』へと、変化したことを示していると考えられる。③『類聚三代格』の写本研究の成果を踏まえ、従来の研究成果とは異なり、大寺と国分寺において、『仁王経』の安居講経は、延暦二十五年から少なくとも『延喜格』編纂時までは、維持されたとみるのがよいと考える。

【キーワード】安居、『仁王経』、国分寺、『類聚三代格』